

ヘンリー日記

小宮豊隆



角川書店



イタリ―日記——小宮豊隆

一九七九年十二月十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三
電話(〇三)二六五―七一―八(大代表)
郵便番号一〇二振替東京三一―九五二〇八

印刷所——東洋印刷株式会社

製本所——株式会社鈴木製本所

目次

ローマ(一)	一九二四年一月十八日	五
ナポリ(一)	一月二十八日	四
ポムペイ	一月二十九日	六
ナポリ(二)	一月三十日	七
ローマ(二)	二月三日	九
アッシシ	二月十四日	一五
ペルージャ	二月十九日	一六

ローマ(三)	二月二十一日	一七一
フィレンツェ	三月一日	二〇五
ラヴェンナ、ボローニャ	四月六日	二八六
ミラーノ	四月九日	三〇三
ヴェローナ、マントヴァ	四月十三日	三二四
ヴェネツィア	四月十五日	三六
あとがき	小宮金吾	三七四

イタリー日記
(一九二四年一月十八日～四月二十六日)

ローマ(一)

一九二四年一月十八日 金曜日

ピサを見ようと思ったが寝坊をして見る事ができなかった。起きてみると空はすっかり蒼々して、日光が豊かに窓からさしこんでくる。小春日和のような暖かさである。汽車はもうイタリアの中を走っているのである。フランスを見てもイタリアを見てもあるいはドイツを見ても、日本ほどちょこちょここと、田舎に家の建っているところを見たことがない。日本の人口が非常に多くて、いまにあふれてしまうだろうというようなことをつくづく考える。こっちはみんな都会にあつまるところかもしれないが、いくら都会にあつまるところで、こんなにぼつりぼつりと村や町があるようでは、いよいよの場合人間のはみ出す余地に事欠くことはまずないだろう。しかし日本じやなかなかそうはいくまい。

イタリアの松は妙な形をしている。手入れしてこしらえ直したように梢がまんじゅうのようななりをしている。だから遠方から見ると松林が、まるで杖のさきにまんじゅう笠をつっかけ行列

でもしているように見える。杉も妙な恰好をしている。信州の松本あたりに行くとき庭木を手入れしておそろしく穂の長い筆のようにする。ここの杉がちょうどあれである。しかもそれが野生らしいのだからおどろくほかはない。ルネサンスの庭園はこういうものを材料にしているから、それであいう人工的な感じのものになるのではないかと考える。また一方からいうとルネサンスの庭園であいう人工的なものをこしらえたから、自然、松の木だの杉の木だのがこういう恰好になってきたのではないかという気もする。日本の松の木は日本の庭園で賞美される松の木の恰好をしている。自然が人工を産みだすのか、人工が自然を生みだすのか。ルネサンス以前のイタリアの松はどういう形をしていたのか。植物学者などにきいてみたい。

松と杉の恰好をのぞけば、イタリアの自然は随分日本の自然に似ているようだ。ことに右手は海、左手は畑をへだてて山だの丘だのが起伏しているようなところを通ったときには、ちょうど春さきに北九州の海岸を汽車で走っているような気がした。土の色がじつによく似ている。草の枯れた色がまたよく似ている。枯れ色の間から萌え出る草の緑と枯れ色の調和するさまがまたよく似ている。丘には石ころがごろごろしているところも似ている。山に木立がすくなくて灌木がおどろおどろと、ほとんど一面に二、三尺の高さに茂っているところもよく似ている。茂みをとおして山の地肌がのぞけている、その色の工合も日本によく似ている。全体として冬ざれているところに日光のさす感じも似ている。日光になんとなくデリカシイが欠け、輝きだけがつよいといった、熱帯的な感じがやはり九州の日光に似ている。

しかし熱帶的の感じは日本よりもこっちの方がよほど強い。そのせいかすべての建物が熱帶の日光にさらされた、さらされて熱帶風によれたような感じである。ちょうど砂漠の色をしている。山の頂上だの山の中腹だのに時々ひとかたまりの家がたっている。どこかの町だろう。それがやっぱり壁土色をしていて、いかにも妖怪じみている。死者の町ということばが思いうかぶ。しかしイタリアの山の肌だの山の木の色だの、畑の色だの畑の青味だのそういうものが、今見せている冬ざれた色にいかにもよく調和している。緑が吹き出して自然全体に生氣が横溢したら、こういう町なぞの色の感じはどうなるだろう。いまのような調和はとうていえられまい。

方々にサボテンが生えている。そ、つがある。し、ゆ、ろがある。ユーカリがまた非常に多い。どうしても熱帶である。

ドイツ人がイタリアをあこがれる気持は、あの暗い陰鬱な自然を背景にしてはじめて理解されることである。我々のような美しい自然を持っているものにとってはそれほどとも思われない。我々よりもっと美しい自然を持っているフランス人から見たら、もっとあっけない気がするだろう。パリから来た我々の目には、ここの自然やここの日光は味にあまりにもこまやかさがないのだから。

二時四十分にローマに着く。赤帽が荷物を受取るのにわれがちに手を出し、赤帽同士であらい言葉をとりかわし相手をおしのけようとする。それを見ただけで気性のあらいイタリアに來たと

いう実感が湧く。外に出るとホテルの客引きが来ているから、それにお前のところに行くのだという。駅前にならんだ自動車のうちエデン・ホテルの自動車に乗る。駅前あたりもやはり熱帯的な感じがある。日光の色ともくもくとしたあたたかさのせいだろうか。第一建物の色からして黄の勝った色がつかつてあるのもその感じをつよめるものだ。ホテルのあるルドヴィチ街に行くまでにいくつも坂を上ったり下りたりする。道ががたがたである。

ホテルについたら、原さんのいらした部屋をさしあげますと支配人らしい男がいつて四〇六番に入れてくれる。

お湯にはいる。腰が痛んでいたがすこしなおったから、ぐるぐると近所をあるいてくる。どうもローマというところはおそろしくざわついたところである。イタリー人らしいのはみんなきかないなりをし、きたない顔つきをしている。町幅がせまくて小さな石畳の道がでこぼこして、その上を馬車だのタクシーだのが通って、かなり不愉快である。それにローマの家はルネサンス風だかなんだか知らないが、まるで四角な箱のようで、窓のあけ方でもなんでもちっとも優美なところがない。いかにも実用的でちかごろ日本ではやるアメリカ風である。ローマ人をアメリカ人に比較した和辻哲郎の説を思い出す。どうもこの趣味なぞもアメリカニズムと共通する。はなはだ物質的でちっとも優雅なところがない。

一月十九日 土曜日

今日はまず大使館に行ってみようというので馬車に乗って出かける。馬車のタクシー・メーターをギョットといわせたと思ったら、料金というところに2の字が出て上の方にまた2の字が出た。なんのことだかわからないが、はじめから2の字が出るのはごまかされる証拠じゃないかと思って心細かった。しばらく行つてすぐとまる。門衛が迎えに出る。妙な立派なうちである。お屋敷らしい構えである。門衛にいくらかきいてくれというのと五リラだというから払う。なんだか両方で結託して高くとるのではないかという気がする。ぐるぐる廊下をつれてあるかれる。そうして二人も三人もの手にひきわたされて、大使館の応接間みたいなところに入る。友田君のかいてくれた紹介状を井上翻訳官なるものに渡してくれといつて出す。鬼がわらのような顔をした男が出てきて、不機嫌そうに應對する。このひとは深くつきあつたらきつと親切なのだろうが、ちょっと肌触りのよくないひとだ。とても親切な案内だの注意だのをあたえてくれそうもないという気がする。それから山田君あての紹介状も持っているんだがというと、井上君がその山田君をよび出してくれる。見るとひょこひょこした人で、やあ小宮先生でございましたかとなくかしそうにいう。あなたの手紙が大分来ていましたから、あなたもこっちへおいでなのかしらと思つてこちらで待っていましたという。きいてみると久保田万太郎だの大庭米次郎だの友達なんだそうである。これは奇遇であつた。ひょこひょこした人だなどと感じたのが気の毒だったとも思う。すこし待っていて下されば、どこかに御飯を一緒にたべに参りましょうという。待っていて手紙をさがしたり読んだりしていきましょうという。

妻から二通手紙が来ている。一通は十二月二日付で子供の手紙が三つ入っている。曠三（三男）も字を書くようになったとみえて書いてよこしている。この前地震のとき三人でよこしたはがきを曠三のは金吾（次男）が書いてやったものだと思っていたが、これで見るとそうではないらしい。曠三が字を書くようになったということが自分には非常にうれしかった。あの子と自分とが離れていても不完全ながらもコミュニケーションができるということがうれしいのと、今一つはあの子が字を書くことを知るの、あの子の神経質な心に表現をあたえようとぐちがひらかれることにほかならない、それがうれしいのと両様のよろこびであった。妻からは地震当時のことをこまごまと書いてきた。アルヴォアンのうちにいた時分、地震当時の手紙が来ずに地震後の手紙が来たので、前のほうのはなくなっただけかもしれないとやってたからである。書之助（長男）は二階にいて本の整理をしていて、本箱が倒れ本に道をせめられてどうすることもできなかったの、しばらく二階から下りてこなかった。一ゆれも二ゆれもすんだあとで、やっとはしご段をかけおりて出てきたとある。今きいてもおそろしい。

吉田翻訳官に東京の地震の公報があったかときいたら、公報はあったが大したことはないようだ、九月の半分位のひどさだそう。あわてた者がすこし死傷したようだが大したこともないようだ、心配なことはないという。半分の強さといったら大したものだろうが、パリの地震計によると十分の一だとあるから、なんだかそっちの方を信じたい。

山田君が出てきてこれから「シーザー城址」という料理屋へ行きましょうという。妙な狭く
しい町の、石のでこぼした道を通ってそこへ行く。道で会う労働者どもが実にきたないなりを
している。人相がはなはだよくない。新しい家のとなりに古い、壁のおちかかったような家があ
る。スタイルもめっちゃめっちゃである。荷車をろばにひかせて空車のままむやみにかけ出させてい
るのが大分ある。それから電車通りの電車みちのまん中から水が吹き出ている、レールに沿って
水がどんどん流れて行くようなところがある。家の片すみの壁に小さな壁龕をつくってその上
の方から栓をひねると水がじゃあじゃあ出るようになってるのが方々にある。練塀にとりかこま
れた邸宅のようなものが沢山ある。練塀の上にはガラスのかけらを一杯に植えてあるのもあ
った。

「シーザー城址」という料理屋の建て方は実に不思議であつた。昔のローマの家を模してつく
つたのだそうで、大きな円天井にわかれてゆく大きな柱が幾個所にも立っていて、しかも天井は
棟木だのたる木だのがあらわに肋骨のように見えている。中に入ると非常に寒い。窓際に席を占
めると向うにシーザーの宮殿のあとと、コロセウムのあとが見える。宮殿のあとの廢墟の色は淡
紅色でなかなか美しかった。いくつも大きな窓が口をあいてなんとなく凄味があつた。コロセウ
ムのあとには紅殻色にぬった工場のようなものが六棟か七棟ならんでいる。その前に杉の並木が
一列にあつて、その手まえは桃畑か何かの畑になっている。妙に荒れ果てた感じで、昔のコロセ
ウムをリアルに思いうかべることはとてもできない。いくらデフォームするといつてもこの位デ

フォームすれば沢山だ。

カムパニアの野が見えるといっていたからどんなところかと思っていたら、なんだか冬をとおつて来たせいとか、かさかさな感じがして、武蔵野とあまりかわりがない。もっとも三、四月ごろになったらさぞ美しくなるのだろうとは思ふ。

久保田と大庭によせがきをする。久保田には「笠松とまんぢゅう杉とうららかに」、大庭には「春を追うて身はつばくろの旅寝かな」という句を書いて送る。

山田君は芝居の方に頭をつっこんでいると見えて、誰とかを紹介してあげましょうとか、どこか舞台裏を見せてあげましょうとか、いろんな話をしていた。人形芝居がどこかにあるから是非に見に行つておいでなさいともいつていた。人形芝居には興味がある。是非行つてみたい。

芝居の雑誌ではどんなのがいいかときいてみたら、コメディアというのがまあいいだろうといつていた。明日コンスタンチで「リゴレット」がマチネーにあるはずだから、行つて御覧になつてはどうですともいつた。

ミモザの花というのを往來の花屋で売っている。葉はねむの葉のようでもっとやわらかである。花は黄色で、ちようどごく小さな金平糖位の大きさで、毛のような弁が丸い形を丸くつつんでいる。ちよつとあわれな花である。

歸りにフォロローマノを見る。シーザーだのアントニオだのが演説したのはここいらだそうだ。

シーザーの死骸を焼いたのはあそこだそう。この道が世界に通ずる道路で、あそこからここまでが凱旋道路だなどという説明をきく。凱旋門はエトワールの門の原型になるわけなんだろうが、ディテールに多少不備なところはあっても、全体からいうとエトワールの門の方がどっしりしていて心持がいい。こっちの方がなんだかイミテーションだという気さえする。

マリネッティの芝居があると出ていたから、見ようかとも思ったが、なんだかくたびれたのと、飯を喰ってしまったって話をしていたらおそくなったのとでやめる。お湯に入って寝る。

小西誠一に二ポンド貸す。これで総計八十ポンドの貸しになる。

ベルリンから「潮音」がまわってきた。十一月号である。十二月号は申し合わせによって休むとある。

昨日お湯に入っているうちにヴァレー(給仕)が小西の荷物を持ってきたから、あとから来いといったが通じないのでお湯からあがって金をやったりなんかした。今日大使館で外套をとって寒い部屋で長い間ぐずぐずしていたせいか、昨日汽車の中でうたたねをしたせいか、それとも料理屋で寒いバルコンに出て話をしたせいか、すこし風邪心地である。

一月二十日 日曜日

朝起きると雨が降っている。とても外に見物に出かけられそうもないから、うちにて日記を書いたり本を読んだりする。昨日山田君の話ではコンスタンチで「リゴレット」がマチネーに出

るということだったから切符を買ってもらう。五時からなのだそうだ。マチネーの五時は我々にははなはだ珍しい。それからここは入場料と座席料とふた通りとる。九州の田舎では自分の小さい時分、小屋がけの芝居があつて、やっぱり入場料と場代とを別々にとつていた。あれは昔の風なのだろう。ローマにそういう日本の風の風が残つていようとは思わなかった。こつちも昔はやっぱりそうなのかとも思われる。

コンスタンチに行つてみるとこれはまた恐ろしく大きな小屋である。第一舞台の高さが恐ろしく高くかつ大きい。それから天井が馬鹿に高い。高い天井のまんなかには大きなまういくぼみがあつて、そのまんなかにかつと電氣をつけ、ガラス玉をつないだ長いひもがその電氣をまわくつつんでゐる。きらきらしてなかなか豪華な感じである。棧敷は平土間にすわつてゐる我々の頭ぐらゐの高さのところにあつて、その天井がまた非常に高く張つてあるから、これもほかの劇場の棧敷にくらべて、図抜けて背が高いように思える。棧敷には広狭ふた通りある。広い方は十人以上もはいれそうだ。うしろの壁にとりつけた外套かけも五つで扉の両側に都合十あつたようである。そのうえにはまだ棧敷が二段ある。それから帝劇の三階みたいなものがあつて、さらにもう二段ほど追ひこみの場のようなところがある。てっぺんまではかなりな距離があるのにおどろく。平土間に入るには、長い廊下をぐるぐるまわつてオーケストラのそばの入口から入るようになってゐる。その入口を二段ほどあがると平土間のある床に出るのである。床の上には通路だけしか敷物が敷いてない。椅子にしても鉄製で床にはうちつけてない。すこしからだをうごかすと